

## 特集への緒言：「グローバル化時代の人の移動と アイデンティティー若年層に着目して」

### Introduction to Special Issue: Migration and Identity in the Age of Globalization: The Case of the Youth

川村陶子\*  
Yoko Kawamura

今回の特集では、2011年度に成蹊大学アジア太平洋研究センターで行った連続講演会「グローバル化時代の人の移動とアイデンティティー若年層に着目して」の報告者に寄稿していただきました。本講演会では、4名の気鋭の女性研究者が、アジア太平洋地域における若者たちの「いま」について、教育学、社会学、文化人類学の視点から、刺激的な考察材料を提供して下さいました。本特集に掲載した論考は、その際の講演内容に基づき、各報告者に最新の研究成果をまとめていただいたものです。

杉村論文は、学生の国際移動の量的拡大およびルート多様化の流れの中で変容する高等教育政策と、そうした高等教育政策の変化が留学目的国の国家や社会、そしてそれをとりまく地域に及ぼす影響を考察しています。高等教育の大衆化と多様化は、学生の留学先の選択肢をも多様化させ、それまで留学生送り出し国であった途上国の一部が高等教育の国際的拠点すなわち「教育ハブ」となる現象を生みだしました。本論文では、イスラーム圏の学生の交流拠点となっているマレーシア、内戦終結後の国家発展戦略として南アジアのハブ形成を目指すスリランカを事例に、「教育ハブ」形成が国家単位のみならず地域単位で進む可能性や、留学生の急速な受け入れが文化摩擦やナショナリズムをも引き起こしかねない「両刃の剣」であることを論じています。よりよいライフチャンスを目指して国境を越える若者たちの動きは、高等教育政策の国際化・グローバル化をひきおこし、国家や地域のあり方に根本的な変容を迫っているのです。

続く3本の論文は、若者たち自身の行為や関心により直接的に焦点を当て、彼らが世界の変化の基盤となる新しい文化やアイデンティティをつくり出す過程を描き出しています。藤田論文は、日本人の親を持ち米国や英国に居住する日系「新二世」たちへのインタビュー調査を通じて、同じ「新二世」でも言語や移動パターンなどの条件によって帰属意識がさまざまであること、衛星テレビ放送やSNSなどの電子メディアが若者たちの間に国境を越えた「ディアスポラの公共圏」をつくり出していることを論証しています。トランスナショナル・アイデンティティは第二世代の移動者でも顕著に現れることがある反面、そうした越境的アイデンティティの形成が国際移動や電子メディアによって必ずしも促されるわけではないことが明らかにされます。

白石論文は、デジタルメディアを使いこなす「二重言語」の若いインテリゲンチアたちが今

\* 成蹊大学文学部准教授、Associate Professor, Faculty of Humanities, Seikei University  
E-mail: kawamura@fh.seikei.ac.jp

日の世界の革新を主導していることを、文化人類学の理論と筆者自身のフィールドワークに基づいて明らかにしています。今や世界中の若者に愛されている日本のマンガ・アニメは、各地でさまざまに解釈されその形を変えるとともに、国境を越えたファンダムという新しい共同体をつくり出すグローバル文化となっています。その広がりと同様な変化は、もはや「クール・ジャパン」といったナショナルな括りには収まりません。本論文はまた、国際化とグローバル化、国民文化、ポピュラーカルチャーなどの概念枠組みを整理しており、今日のグローバル化や若者文化への理解を深める道しるべともなっています。

最後の趙論文は、アジア三か国を移動して生活する中国朝鮮族の高学歴若年層へのインタビュー調査をもとに、移動パターンや子どもへの言語教育戦略の多様性、そして移動する若者自身のアイデンティティが「ハイブリッド化」している様相を論じています。研究のアプローチは藤田論文と共通していますが、筆者の関心の中心は「移動する若者」のライフコース構築にあります。分析結果からは、彼ら・彼女らの新しいアイデンティティが家庭教育を通じて次の世代へと引き継がれていく様子を読み取ることができます。

4本の論文は、それぞれが各執筆者の研究分野における最先端の学術的貢献であると同時に、「グローバル化」「移動する若者」「アイデンティティ」「メディア」「高等教育」といった共通のキーワードを用い、総体としてアジア太平洋地域のダイナミックな変化をとらえる手がかりを読者に与えています。意欲的な研究成果を提供して下さった執筆者の方々に、心から感謝のことはを申し上げます。